
フランス映画論II

Imageとリアリティの考え方

兼子正勝

Image概念

Image概念

Image: 現在の語法

映像、画像、心像(イメージ)

Imageの語源 < [lat.] imago

何かに似たもの、似せてつくられたもの

ex. この息子は父親のimagoである

ex. 葬式などにつかう死者の彫像

ex. 幽霊

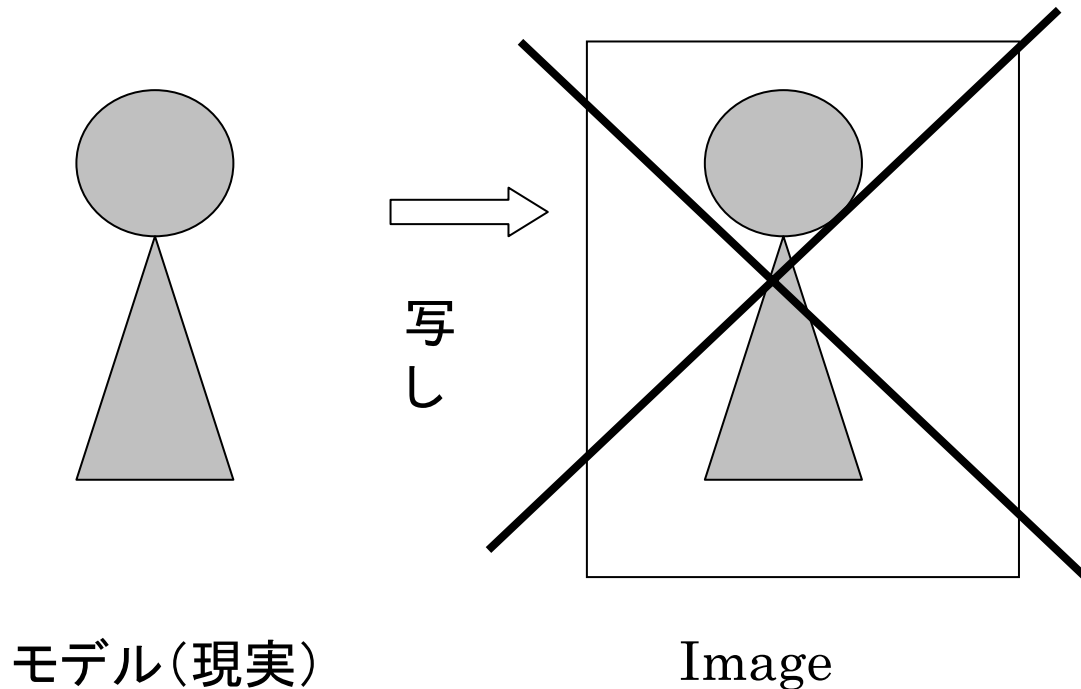
おおむね18C まで、「image」の概念は否定的なニュアンスで用いられていた

19C以後、肯定的なニュアンスに変わった

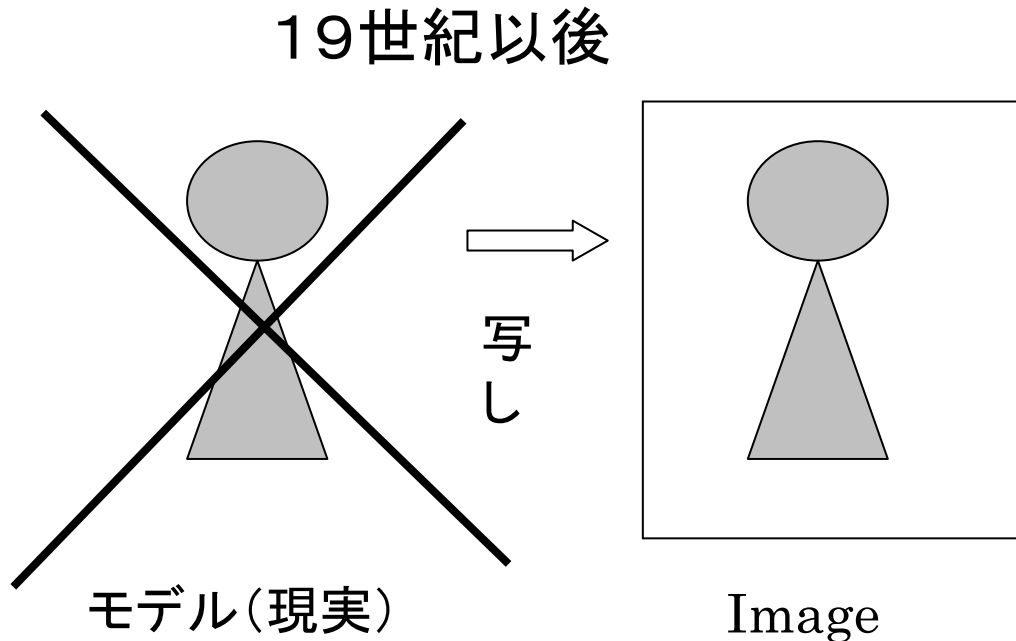
ただし、現実との対照・参照関係においてimageの概念が使われることにかわりない。

復習：イメージ概念

18世紀まで



復習：イメージ概念



エドガー・ポー「楕円形の肖像画」

スティーブン・ベントン: 死んだ父親とチェスをする

スティーブン・スピルヴァーグ: 死に絶えた恐竜を
よみがえらせる

イメージ概念の流れ

Baudelaire(1827)

1859: Salon de 1859

Breton (1896)

1924: Manifeste du surréalisme

Sartre (1905)

1935: L'Imagination

Lacan (1901)

1953: Congrès de Rome

Bonnefoy (1923)

1953: les Tombeaux de Ravenne

Klossowski (1905)

1954: Roberte ce soir

1956: Le Bain de Diane

ボードレール

1859年のサロン

[写真が、自然をその通りに写すことに長けているのに対して、絵画は、夢見ることを表現しなければならないという一節の後で、ボードレールは、想像力を「諸能力の女王」と呼ぶ。そして...]

彼女 [=想像力] は被創造物のすべてを解体し、その起源は魂の最も奥底にしか見いだされ得ぬ規則に従って取り集められ配列された素材をもって、一個の新しい世界を作り出し、新たなるものの感覚 [サンサシオン] を産み出すのです。彼女が世界を創ったのだから (宗教的な意味においてすらそう言ってもよいと私は思います)、彼女が世界を統治するのは正当です。

阿部良雄訳、ボードレール全集、第3巻、p.311

ブルトン

シュルレアリスム宣言

自由という一語を除いて今もなおわたしを感動させるものはほかにない。[...]がらくたずくめの遺産にまじって、精神の最大の自由がわたしたちに残されたことに気づくべきである。その取り返しのつかぬ濫用を防止するのはわたしたちの努めである。イマジネーションを隷属に追いこむことは、たとえ卑俗な意味で幸福と名付けられるものにかかわる場合にせよ、自己の底に見出される、至高の正義にまったく目をつむることである。イマジネーションさえあれば、いかなるものが可能であるかがわかるのだし、そのことだけで、おそるべき禁忌を少しばかり取り除くのに充分であり、また、誤ることを恐れずにわたしがイマジネーションに身を委ねるのにも充分である。

Manifeste du surréalisme, O.C., Pléiade, p.312

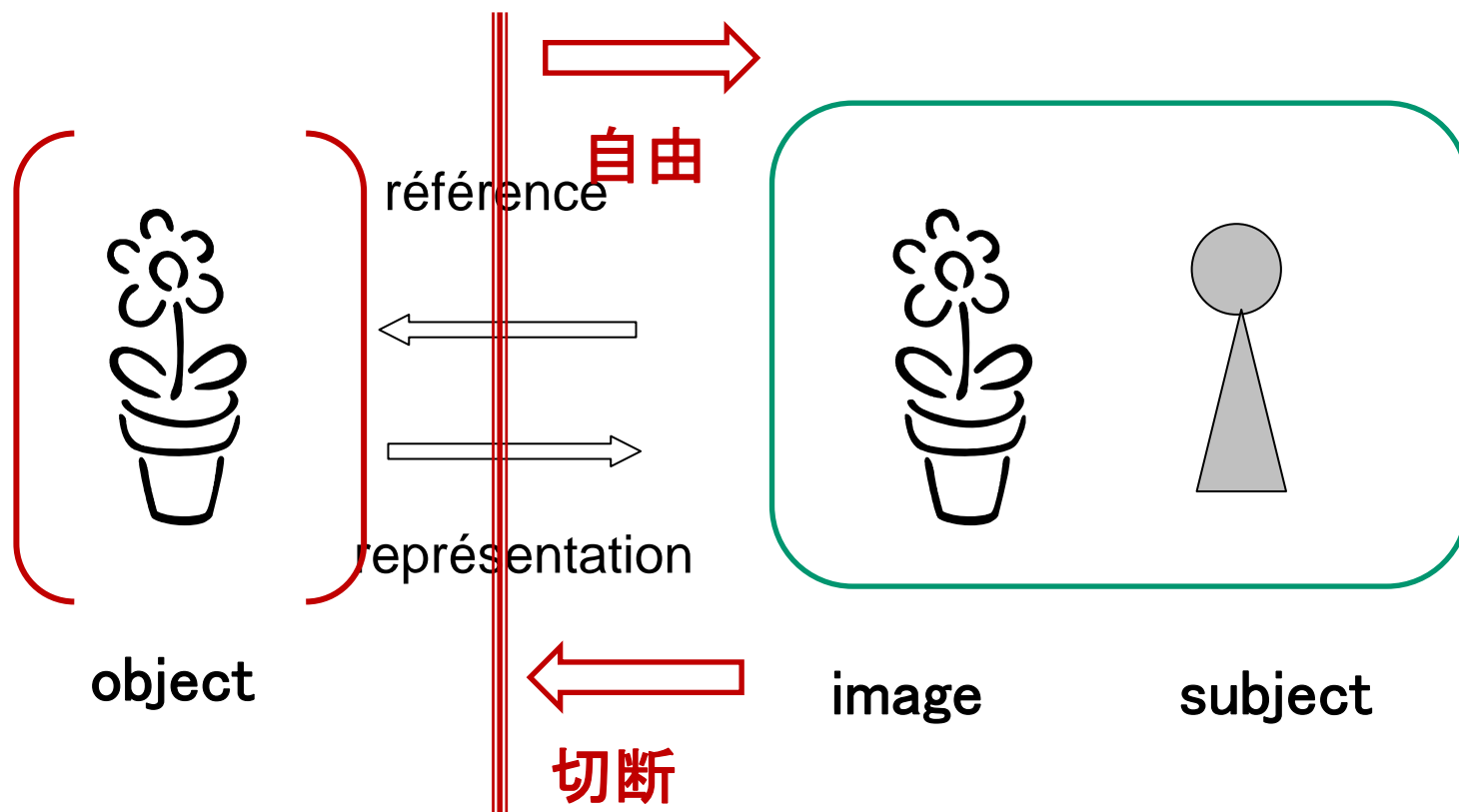
サルトル

想像力の問題

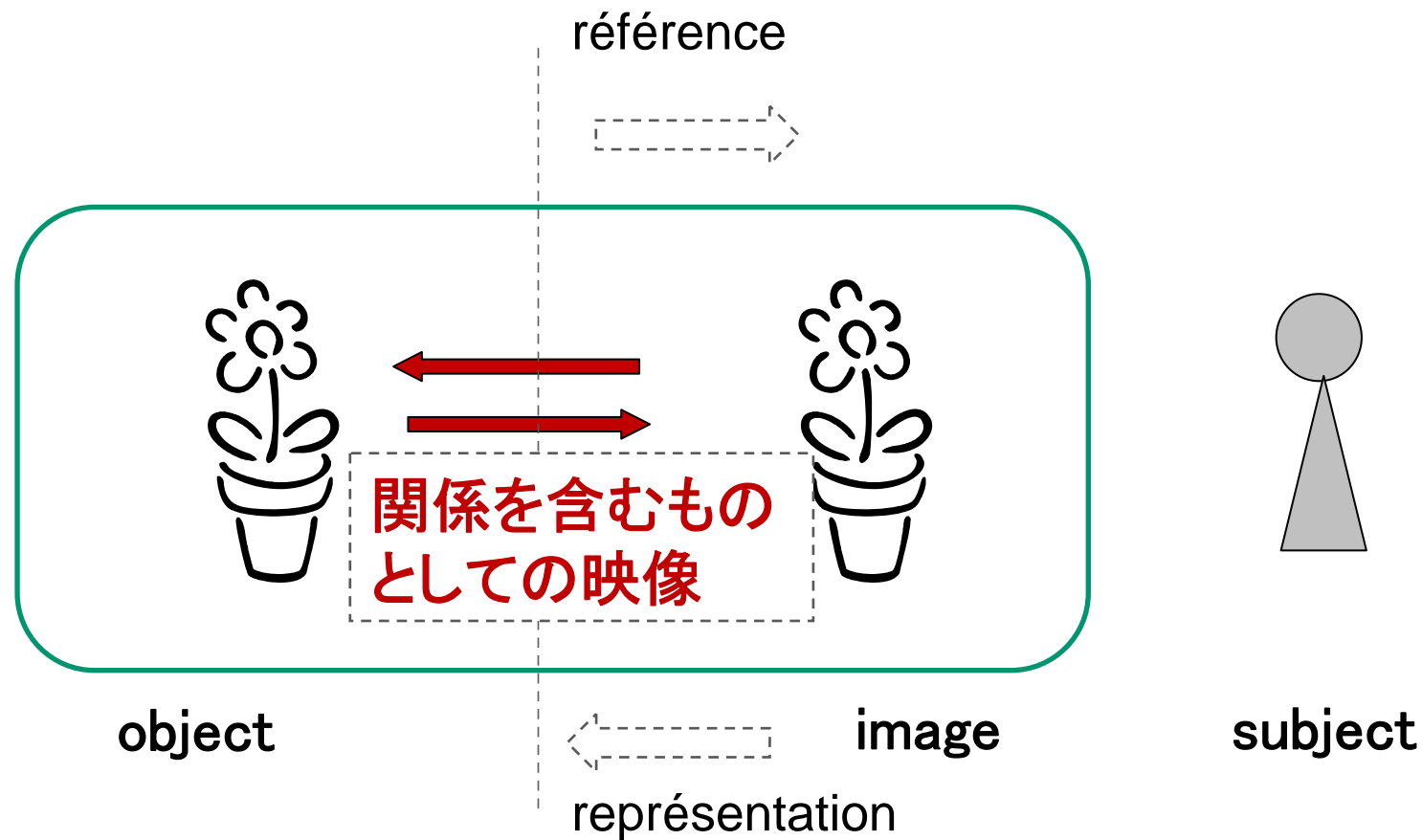
あらゆる意識はその対象物を措定するが、しかし各々その措定の仕方には流儀がある。たとえば知覚はその対象物を現存するものとして措定する。イメージもまた、信憑 *croyance* の作用あるいは措定の作用を含んでいる。この作用は、四つの、そして四つ限りの形式をとりうる。すなわちそれは対象物を、非存在として、あるいは不在として、あるいはどこか他の所に存在するものとして、措定する。それはまた己の作用を《中和する》こと、つまりその対象物を現存するものとして措定しないこともできる。

想像力の問題、サルトル全集第12巻、人文書院、p.16

イメージ概念の図式



イメージ批判の図式



関係を含むイメージ＝映像

Godard, 1959

(古い映画監督たちを批判して) わたしたちが愛するような女の子たち、毎日道ですれちがうような男の子たち、軽蔑したり尊敬したりするような親たち、毎日わたしたちを驚かせる子供たち、あるいはどうでもいい子供たち、要するにあるがままのものたちを、あなたがた(古い監督たち)が一度も映像化しなかったことを、けっして許すことができない。

Jean-Luc Godard par Jean-「Luc Godard, ed. Pierre Belfond, 1968

関係を含むイメージ＝映像

アンドレ・バザン、「写真映像の存在論」1945

写真(カメラ)は、現実を光によって感光体のうえに「刻印」したものであることを主張。

例として、「トリノの聖骸布」に譬える。つまり、拷問のあげく磔刑に処されたイエスを埋葬のときに包んだ屍衣に、聖なる身体の全身像がそのまま刻印されたのとちょうど同じように、写真や映画の非中枢的なイメージには現実がそのままうつしとられる

関係を含むイメージ＝映像

ロラン・バルト「明るい部屋」1980

写真論の古典

写真の定義

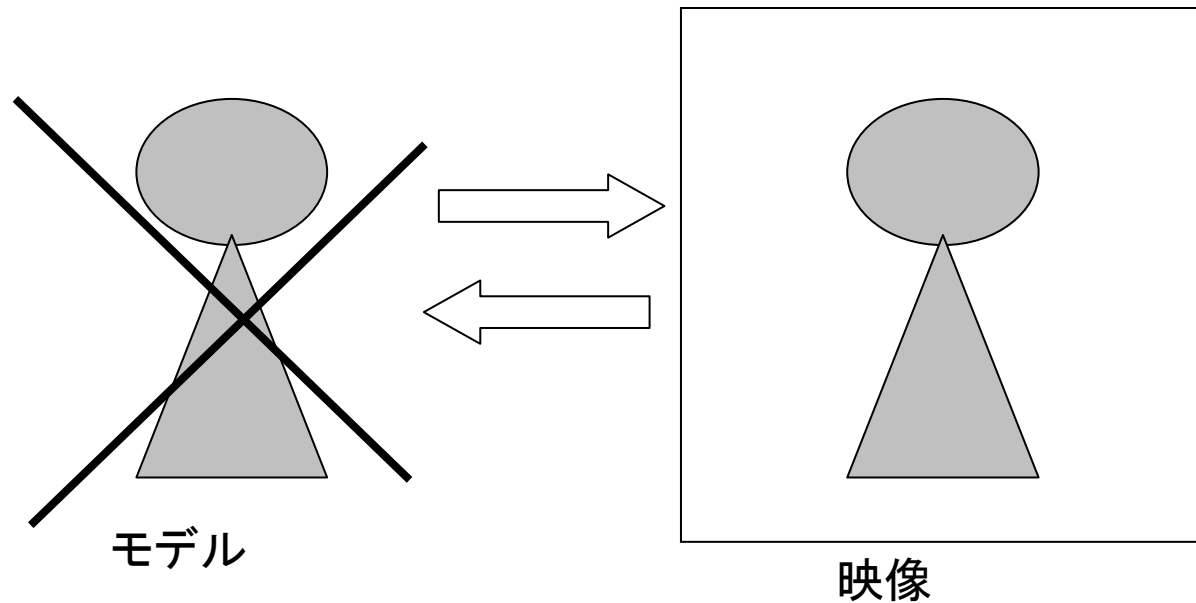
- + それはかつてあった
- + プンクトウム／ストウディウム

1. バルト *Ça a été*

1. 1. 写真の本質:

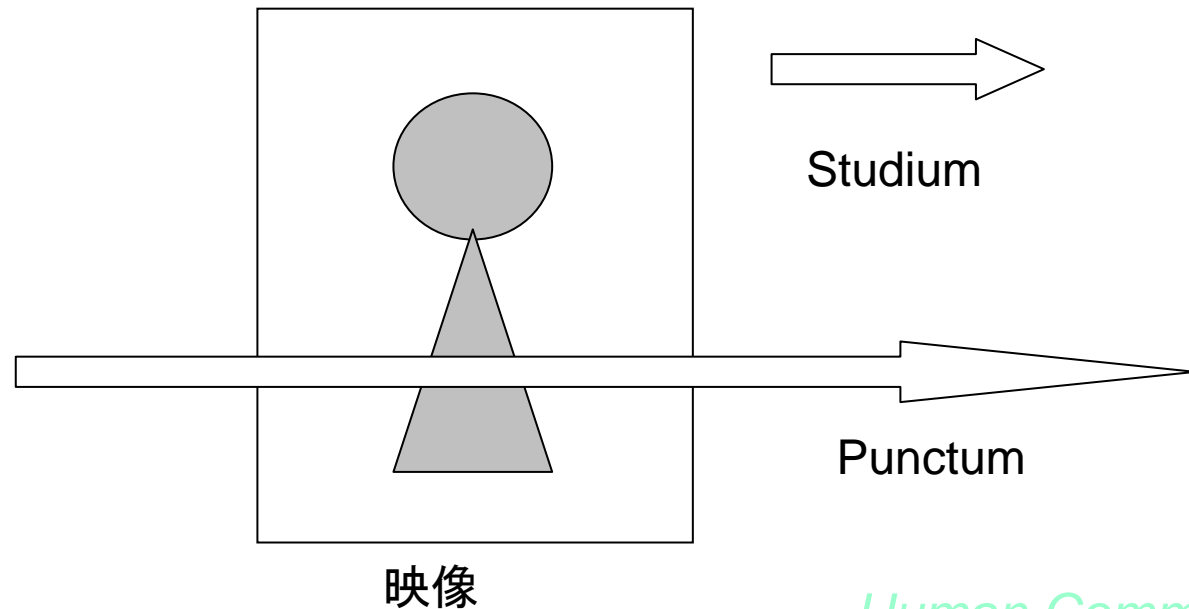
「それはかつてあった *Ça a été*」

- ・写真は指示対象をもつ(それ)
- ・指示対象はすでに失われている



2. バルト studium/punctum

- Studium: 一般的関心の対象
≡ 見えるもの、学べるもの、to like
- Punctum: Studiumを乱すもの
≡ 突き刺すもの、to love



3. バルト例1



コーン・ウェシング：ニカラグア、街路をパトロールする兵士たち、1979

4. バルト例2

コーン・ウェシング:

ニカラグア、我が子の遺骸を
見つける両親、1979



5. バルト例3

ジェームズ・ヴァン・
ダー・ジー:

家族の肖像、1926



6. バルトで理解すべきこと

- 1) 「それはかつてあった」という図式のわかりやすさ
 - < 19世紀以来の図式の踏襲
 - < 映像を映像のなかでとらえる考え方
- 2) Studium/Punctum の図式のわかりにくさ
 - < 映像と映像の外を結びつけようとしている？

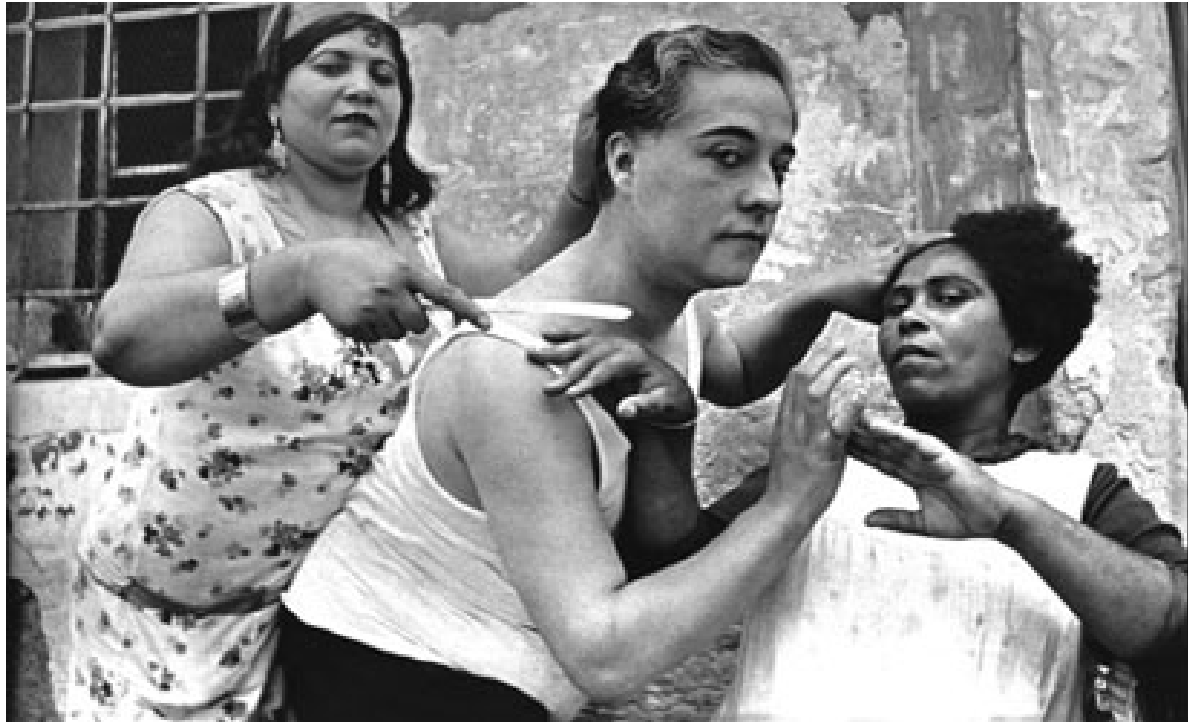
cf. 写真行為論

7. 写真行為論

Serge TISSERON, Le Mystère de la Chambre Claire, Les Belles
Lettres/ARCHIMBAUD, 1996
邦訳:セルジュ・ティスロン「明るい部屋の謎」、人文書院、2001

- ・写真を「映像」として「だけ」考える考え方を批判
- ・写真を「写す行為」の面から考えることの提唱
- ・写真を撮ることは、自分とは異質な「外部」を取り込み、消化し、なじみ深いものにする行為である

8. 参考例



HENRI CARTIER - BRESSON (Alicante), Spain 1932

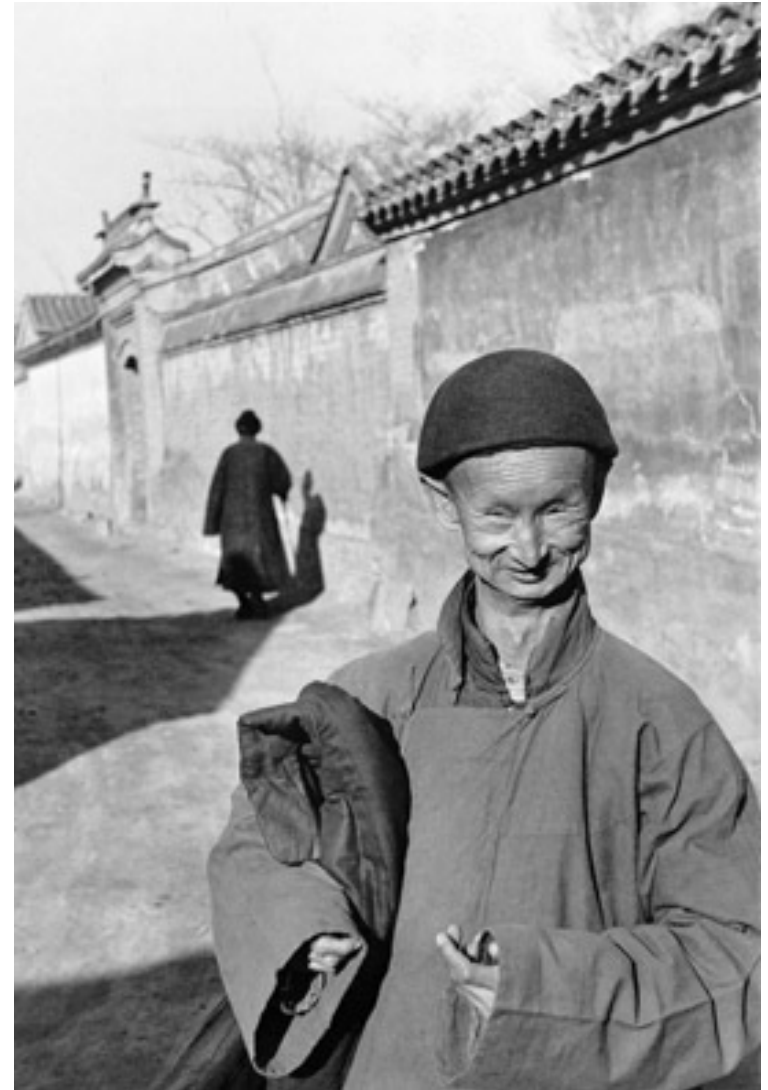
9. 参考例

HENRI CARTIER -
BRESSION
Rue Mouffetard, 1952



10. 参考例

HENRI CARTIER -
BRESON
Pékin, 1949



11. 参考例

Diane Arbus,
1970



12. 参考例

Diane Arbus,
1970



13. 参考例

Diane Arbus,
1970



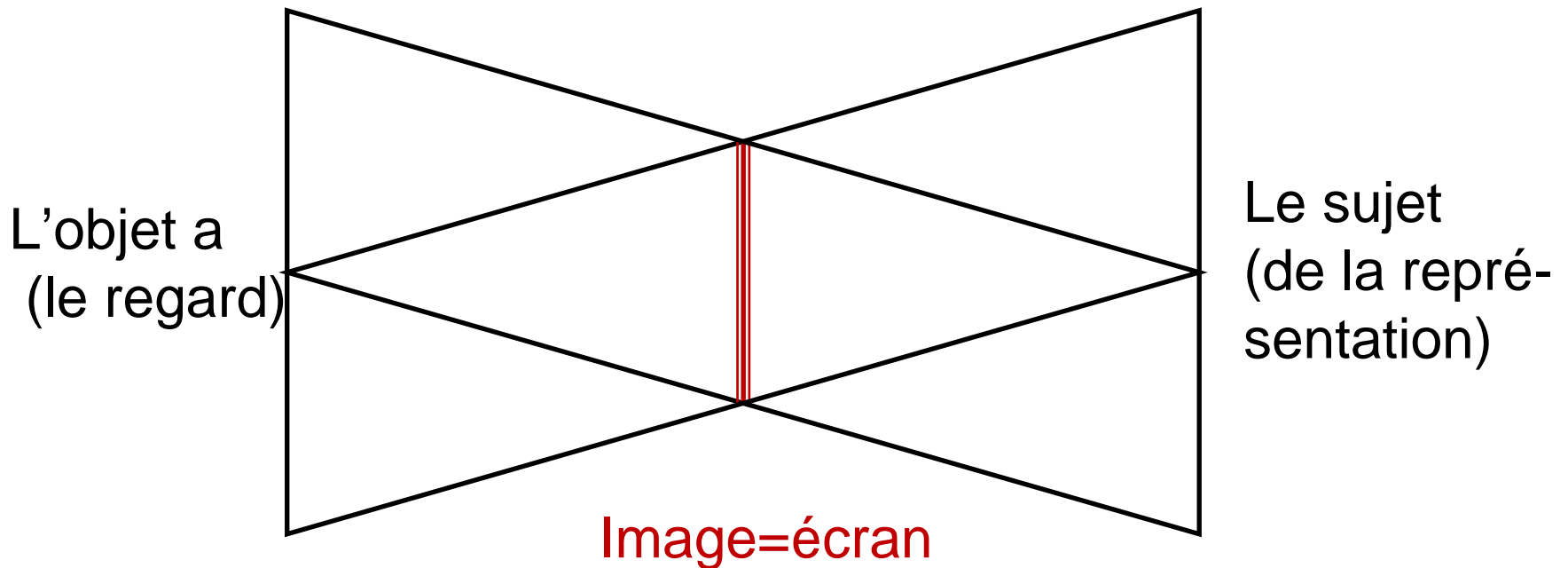
14. 参考例



荒木経惟、Tokyo suicide

イメージ概念の図式

Lacan, « Du regard comme objet petit a », 1964



ボヌフォワのイメージ批判

La Présence et l'Image, 1983

現実がついに十分に具肉された[アンカルネ]というこの印象、逆説的にも具肉作用[アンカルナシオン]から逸らされた語たちからやってくるこの印象を、私はイメージと呼びたいと思います。諸々のイメージ、諸々の世界＝イメージ。これはボードレーが、彼の詩的直感の最も苦しみ多い刻に、次のように書きつけた際に理解していた意味だと思われます。「イメージの崇拜、私の大きな、私の唯一の、私の原初の情熱」イメージ、それは日々の灰色な画面[グリザイユ]には欠けた輝き、しかし夢の常なる渴きが、言語を自分のほうに湾曲させ、生みの乳房のごとくに捏ねるとき、言語が可能にしてくれる輝きなのです。

邦訳、現前とイメージ、朝日出版社、p.37

ボヌフォワのイメージ批判

つづき

愛とは言わずとも、少なくとも狂気を再発明した我らの西欧、その最初の日々以来、＜イメージ＞のメランコリックな精霊[ジェニー]によって、蔑まれた此処と、善とされた他処とのあいだの有害な二元論が、実行不能な秘教的知識が、馬鹿げたスローガンが、何とたくさん撒き散らされてきたことでしょう！ [...]＜イメージ＞は、画像師[イマジエ]がいかに誠実であろうとも、確かに嘘なのです。

邦訳、現前とイメージ、朝日出版社、p.38

ボヌフォワのイメージ批判

つづき

言葉の真実、それを私はためらうことなく、現前のためのイメージとの戦い、――イメージ＝世界との戦い――であると言いました。しかしそれは、手はじめの近似的な言い方にすぎず、[...]今度はその背景に言及してみたいと思うのであって[...]。詩の観念のその第二の水準とは何か。それはつまり、こうして有限性を目ざしつつ、廃棄の数々、閉鎖の数々と戦うことは、愛することではあり得ないということです。[...]もろもろのイメージは、絶対化されれば詩の瞞着ともなったはずですが、人がそれを横切るように体験する瞬間から、かくも原始的で、かくも貪欲であるが故に、われわれの裡にあって人間性のありのままの姿に他ならぬこの欲望の、全く単に自然な形態にすぎないものになる、このことを詩は、少なくとも予感はその最高の高みにおいては、理解することに成功しなければなりません。

邦訳、現前とイメージ、朝日出版社、p.57-58

イメージ批判の図式

